

政務活動報告書

令和6年8月26日

〔会派名：清風クラブ 〕

代表者氏名	常俊 朋子	記録者氏名	小林 勝
活動者氏名	福田博行、常俊朋子、坂本直司、小林勝		
活動日	令和6年8月21日（水）～令和6年8月21日（水）		
活動先	長野県安曇野市		
活動目的	安曇野市で暮らす を実感。日帰り移住ツアーについて		

概要

安曇野市は日帰り移住ツアー等を企画し、移住促進を推進している。移住促進用 PR 動画には移住大使の柔道の篠原氏を起用しイメージアップをはかっている。

現状として市内に県立高校が4校あるが大学は無く、電車で30分ほどかかる松本市に2校あり、働く場所も同様に安曇野市には少なく、労働者の20%程度しか市内に働く場所がない。残りの80%のほとんどが松本市で働いている。

以上の理由もあり、移住者の多くは松本市からの転入との事である。

令和2年くらいまで人口の社会増が見られたが、コロナ禍に市内の別荘地が売れたのが主な要因との説明を受けた。

お試し住宅と銘打ち、最長6泊7日まで利用可能な移住体験用住宅を用意したりもしたが71人の利用のうち7%の5名程の移住という結果である。

また令和7年度は高齢化率33%の予測だが、このまま行けば令和27年度には高齢化率43%との試算もあり、人口の自然減への対策も必要だとの説明も受ける。

移住促進への取り組みは官だけでなく官民一体で取り組まなくてはいけない課題だとの説明があり、移住ツアーなどだけではなく婚活やイベントなど多面的な取組が必要だと討論の中で感じた。



研修視察報告書

令和 6 年 11 月 26 日

[会派名：清風クラブ]

代表者氏名	常俊朋子	記録者氏名	常俊朋子
視察者氏名	福田博行、坂本直司、小林勝、常俊朋子		
視 察 日	令和 6 年 8 月 22 日（木）		
視 察 先	長野県茅野市		
目 的	地域づくりを組織して住民自治を運営している名張市であるが、人口減少等でその運営に課題が多く苦慮している。茅野市の「パートナーシップのまちづくり」をスローガンとした、地域コミュニティの活性化の推進について見分する。		

視察概要

茅野市では、平成 7 年から「福祉」「環境」「教育」の 3 課題を重点テーマとして「市民、民間主導、行政支援（公民協働）によるパートナーシップのまちづくり」に取り組まれてきた。その後、「情報化」「国際化」「地区センターの運営」といった分野でも市民ネットワークが形成され、市民と民間と行政が役割分担に基づき、取組みが進められてきた。

全市的な取組みが定着しつつあることや「地域主権」の流れを受け、これからの課題は、市民の皆さんの生活に、より密着した地域コミュニティにおける「パートナーシップのまちづくり」＝「自助」「共助」「公助」のシステム作りにあると位置づけられた。

平成 17 年からは、「パートナーシップのまちづくりの第 2 ステージ」と位置づけ、10 地区の拠点の名称を「地区コミュニティセンター」に改称し、職員の増員も行い、平成 18 年 8 月までには、「地区コミュニティ運営協議会」が設置され、事務局は地区コミュニティセンターの職員が担当している。

そんな中、7 月 6 日から 7 日に開催された「第 23 回コミュニティ政策学会名張大会」にも両日参加され、「赤目まちづくり委員会」の事例発表を聴講し、勉強になったとおっしゃっていただいた。

茅野市では、何度も見直しを行いながら着実な成果も出され、NPO 法人や市民団体、民間の任意団体との連携を行政が主体となり、ネットワークづくりの実績を作ってきた。

しかしながら四半世紀を経過し、分野別団体と、市との関係性や地区の温度差、あらゆる主体の協働としてのプラットフォーム機能の再構築を考え直す時期が来ていると伺った。

背景には、コロナ禍による活動停止、少子高齢化、担い手不足による存続危機に加え、財政危機による公共施設再編や行政改革が目の前に迫っているとのことであった。

今後は、「シンパートナーシップのまちづくりによる持続可能な地域社会」を掲げ、バージョンアップを目指し、住民自治と団体自治（茅野市）の協働の仕組みの再定義「自助→互助・共助→公助」（補完性の原理）を取り入れ、ともにまちづくりに取り組む協同体として、市民団体の意識を変革していくつもりであると伺った。

名張市の地域づくり組織も折り返し地点の時期となる。福祉の理想郷を意識しながら、住民自治の継続と向上に向けてどのように政策に反映していけるのか、持続可能な地域づくりのための考察を深めていきたい。

